

## かつての山の暮らし

### 炭焼き

上勝はかつて有名な炭焼きの中心地でした。周辺の森林から伐採された木材は窯で焼かれ、販売用の炭と家庭用の炭にされました。それらの炭焼き窯のうち四つが現存しており、高丸山と旧榎原集落間に復旧された山道（炭の古道）と共に、かつての山の暮らしの現代の痕跡となっています。復旧された山道は長さ約七キロメートルで、近代よりずっと以前に榎原の人々が通ったのと同じ道を今日の登山者が辿ることができるようになっています。この山道からは深い森での炭作りの商売に関わる重労働がうかがい知ることができます。人々は 20 キロ近く離れた坂本（現勝浦町）で売るために、その炭を足で運んで山を下らなければならなかったのです。千年の森ふれあい館は、炭焼きの工程を最初から最後まで実演するイベントを十一月と十二月に開催しています。

### 森と地域の暮らし

戦前の上勝には、クヌギ、ケヤキ、ヒノキ、およびスギなど、様々な樹木の生息する二次林がたくさんありました。二次林とは、人や自然によるかく乱の後に再生した森林のことで、人の手が加わったことのない森林に比べると環境に優しくないように思えるかもしれませんが、その見解は議論を呼んでいます。人間の森林管理は、つる植物が樹木の成長を妨げるのを防いだり、太陽光が木々の間に差し込むのを確実にしたり、古い樹木を伐採して新しい芽が切り株から生えるようにしたりすることで、二次林を健全な状態に保つのに役立ちました。それらの伐採された木々は地域のライフスタイルを支え、森林管理のサイクルを完了するのです。

これらの地元の森が人々にもたらしたのも木炭だけではありませんでした。森は、農業に必要な水、山菜やキノコなどの食料、また調理をしたり農具や生活道具を作ったりするために必要な木材などを提供してくれたのです。上勝に住む人々は、様々な木材の特性を活かして特定の用途に利用していました。例えば、スギは湿気を吸い取るので大型の米びつを作るのに使用され、ヒノキはその抗菌特性のためまな板に使用、ヤマザクラはその高い復元力のため敷居に最適であり、キリは湿気を調整するのでたんすに、アラカシはその耐久性のため彫られて農具の取手になりました。